

幼児のにおいへの気づき —色水遊びを通して—

A Study of the children's perception of smell on a play with water colored by plants

貞方 聖恵

Masae SADAKATA
(福岡教育大学大学院)

野見山 萌

Moe NOMIYAMA
(福岡教育大学大学院)

川里 智子

Tomoko KAWAZATO
(福岡教育大学大学院)

船越 美穂

Miho FUNAKOSHI
(幼児教育講座)

(平成29年9月29日受理)

要 約

本稿は、幼稚園での保育実践「色水遊びを通したにおいを感じる活動」に関するエピソードを記述し、考察したものである。対象の幼児は、これまでの保育活動で視覚的・触覚的な面に関心を持った遊びを行ってきた。そこで、においのある植物を保育環境に設定したところ、植物のにおいへの気づき、関心を持つことで、においを遊びに取り入れることが示された。エピソード分析の結果、「においへの気づき」と「社会性の発達」において年齢による違いが明らかとなった。においへの気づきで子どもたちの遊びの幅が一層広がるとともに、「におい」をテーマにした長期的な活動へ展開する可能性を有していることが示唆された。

キーワード：幼児, 保育, 色水遊び, におい, 植物

I. 問題の所在と研究の目的

幼稚園・保育所・認定こども園（以下、保育現場）における色水遊びの実践は、保育雑誌や実践報告などによって数多く紹介されている。実際に、色水遊びは多くの保育現場で行われている。子ども達は、草花から出る色の不思議さに興味を持って飽きることなく没頭して遊ぶ。草花をビニール袋に入れて揉んだり、すりこ木・すり鉢を使ったりする方法で色水を作り、完成した色水を見立て遊びやごっこ遊びに取り入れている。多くの色水遊びでは、子どもたちは色という視覚的な面に関心を持って活動する。しかし、色水遊びにおいて、植物のにおいへの気づきはあまり見られないようである。子どもの遊びは、さまざまな感覚を使って行われている。しかし、色や感触は意識しやすいが、においは意識しにくく、においに関心を持って遊ぶ姿はあまり見られない。子どもだけではなく保育者もおいに対して意識を持つことが少ないのではないだろうか。つまり、保育において、においを意識した活動は少ないことが現状であり、実践研究が十分に進められているとは言い難い。

保育現場において、においへの気づきを取り入れる

ことによって、色や感触などに関心を持ったこれまでの活動に加え、においを意識することで子どもの活動の幅が一層広がると考える。さらに、子どもがにおいへの気づき、興味・関心を持つことによって、子ども自ら「におい」を遊びに取り入れたり疑問を探究したりする活動へつながっていく可能性を有していると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では「色水遊びを通したにおいを感じる活動」の保育実践を行い、結果をもとにエピソード分析を行うことで、遊びを通して子どもたちがにおいへの気づきの様子や活動の中で見られる子どもの育ちを検討することを目的とする。

II. 先行研究

においに関する実践事例について概観したところ、においに関する活動には、二種類の系統があることが分かった。一つ目は、嗅覚のみに着目した活動を行うという系統、二つ目は、においへの気づきからプロジェクト型保育へ発展する活動という系統である。各系統について、においに関する活動がどのように行われているか、以下に紹介していく。

1. 嗅覚のみに着目している系統の事例

嗅覚のみに着目している事例は、生活科とモンテッソーリ教育である。

【小学校生活科における嗅覚を活かした授業実践】

現代の子どもたちは視覚や聴覚に依存する傾向により、嗅覚の活用率が最も低く、生活科における嗅覚の活用に関する研究が少ないと指摘されている¹⁾。また、生活科における嗅覚を活かした授業実践について、愛知県豊田市内の公立小学校教師76人、岡崎市内小学校教師50人を対象とした調査研究では、嗅覚を活用させた活動を「とても行っている」「やや行っている」と回答した教師は全体の44%であった²⁾。嗅覚を使った活動の実践が半数にも満たないことが明らかにされている。

野田ら(2008)は、生活科における嗅覚を活かした授業実践事例を報告している³⁾。

「諸感覚の状況を把握するための手段として、五感体験をプログラム化したネイチャーゲームの一つである、フィールドビンゴを各クラスで行う。味覚以外の4感覚(視・聴・触・嗅)に関する項目がそれぞれ4項目ずつランダムに配置されている。」⁴⁾

ビンゴカードには質問形式で答え、フィールドビンゴカードでマスの埋まり具合から、どの程度嗅覚を活用できているかを図った。フィールドビンゴは2回行い、1回目と2回目ですその変化を調査した。調査対象者は愛知県刈谷市立かりがね小学校第2学年4クラス147名である。まず1回目の結果として、1組から4組の嗅覚活用の割合の平均値が16.5%と低く、嗅覚は特に意識して活用しなければ自覚化することが困難な感覚であることが明らかとなった。その後2回目のフィールドビンゴを行う前に、1組と2組と4組だけに嗅覚のトレーニングを行った。トレーニング内容は、嗅覚筒(フィルムケースににおいのする自然物を入れ、蓋にあけた穴からにおいを嗅がせる)で、におい当てゲームをすることである。トレーニング前後の嗅覚の割合対比で1組の結果は、1回目15%から26%に上がった。同様に2組は18%から26%に上がり、また4組も17%から26%に嗅覚活用の割合が上がっている。3組は嗅覚のトレーニングを行っていないためか、16%から17%とあまり変化がない。このことから、嗅覚のトレーニングをすることにより、嗅覚の利用率が上がったことが分かった。更に2組では、においを表現する活動をトレーニングし、2回目のフィールドビンゴ実施した結果、「～みたいな」「～のような」という記述が多くなった。トレーニングにおいて嗅覚筒からのにおいを表現する際に、たとえる活動を取り入れていたことによる効果だと考える。嗅覚を扱う上で、においを言葉で表現することの難しさもある。においを表現する言葉のバリエーションを増やすことは、においへの気づきへの一歩であることが示されている。

生活科における本授業実践は、ゲームの結果を通して、児童に意識的に嗅覚を使うことに気づかせ、五感の中でも嗅覚の発達を促すために、教材として嗅覚筒を使う事例であった。

【モンテッソーリ教育における嗅覚に関する教具】

子どもの発達には、敏感期という五感への刺激に強い感受性を持つ時期がある。モンテッソーリ教育では、敏感期に子どもが五感を使って様々な情報を収集し、知識として情報を整理していくことを重視してきた⁵⁾。また、敏感期に五感を発達させる感覚教育は、後の言語教育や運動教育等の土台となることも示唆している⁶⁾。

感覚の敏感期には2つの段階がある。0～3歳の段階では、「それが何であるか?」を意識しないまま、様々な色や音、におい、味や手触りなどの印象をひたすら吸収している。その後3～6歳の段階で、吸収してきた情報を頭の中の各感覚の引き出しに整理し、概念の習得に至る。

モンテッソーリ教育では吸収した情報を整理するために、五感をそれぞれ個別に刺激する教具を使用する。教具に関する文献を概観したところ、視覚では20種類、触覚では6種類の教具が提示されていた^{7,8)}(表1)。

しかし、嗅覚に関する教具については、嗅覚筒のみが例示されており、他の感覚に関する教具の数と比べると少ない現状であった。

モンテッソーリ教育の保育活動では、一人一人が個別に興味をもち、においに気づく活動を行うという特徴が見られる。また、感覚教育を行うにあたって、五感をそれぞれ個別に刺激することで、感覚を鋭敏にさせる方法が用いられている。

表1 各五感の発達を促す教具一覧

刺激する感覚	教具名	種類数
視覚(目)	円柱さし、ピンクタワー、茶色の階段、長さの棒、色つき円柱、色いたI・II・III、幾何タンスとカード、幾何学立体、構成三角形、二項式、三項式、四組のはめこみ円柱、赤い棒、長方形の箱I・II、三角形の箱、六角形の箱大・小、植物の葉のタンスとカード、幾何図形重ね、ピタゴラスのカード並べ	20種類
触覚(手、皮膚)	触覚板・布合わせ、温覚筒、温覚板、重量板、圧覚筒、実態認識袋、ひみつ袋I・II・III・IV・V、幾何立体	9種類
聴覚(耳)	雑音筒、音感レベル	2種類
味覚(舌)	味覚びん	1種類
嗅覚(鼻)	嗅覚筒	1種類

(松浦公紀著「モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び」、藤原元一ら著「やさしい解説モンテッソーリ教育」の感覚教具に関する記述を基に作成)

2. においへの気づきからプロジェクト型活動へ発展する活動の事例

1. の生活科やモンテッソーリ教育と違った特徴でにおいに関する活動をしている事例として、レッジョ・エミリア市の幼児教育と鳥取県仁慈保幼稚園による実践事例を取り上げる。

【レッジョ・エミリア市の幼児教育における香りをテーマにした表現活動】

イタリア北部の小都市レッジョ・エミリアにおける幼児教育は、「プロジェクトツィオーネ」と呼ばれるプロジェクト活動を中心に展開されている。プロジェクト活動は4,5人の小グループで行われ、一つのテーマについて長期（数週間から数か月）に渡って活動を行うものである。中でも、レッジョ・エミリア市における教育の最大の特徴は、「アートの想像的経験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出しているところ」⁹⁾にある。子どもたちが好奇心をもって環境に関わり、創造性あふれる表現活動が繰り返されているのである。

レッジョ・エミリアの幼児学校では、五感を育てる環境が意識されている。宮崎（2017）は、学びの空間に「*paesaggio luminoso*」（光の風景）、「*paesaggio cromatico*」（色の風景）、「*paesaggio materiale*」（素材の風景）、「*paesaggio odoroso*」（香りの風景）、「*paesaggio sonoro*」（音の風景）」¹⁰⁾という5つの風景があることを述べている。

本稿では、5つの風景の中から「*paesaggio odoroso*」（香りの風景）に関する事例を取り上げる。幼児学校の学びの空間に「香りの風景」を設定することは、子どもたちがにおいに関心を持ち、表現活動へつながっていくことを意図していると考えられる。「アイデアのあれこれ」¹¹⁾に紹介された23のアイデアの中に、エルネスト・バルドゥッツィ幼児学校での香りに関するプロジェクトが3つ載せられている。「香水の庭」「匂いを集めて変える機械」「香りをたどる。鼻のなかに世界がある」である。その他にも、「小グループに分かれて活動が始まった。集まりで食べたオレンジの味覚と香りを楽しんで、「オレンジの音」をコンピューターのキーボードを使って作曲する子やオレンジの味を淡いピンクやオレンジ色の絵の具で描く子がいる。」¹²⁾と香りを多様な方法で表現する様子が紹介されている。

日本の幼児教育ではあまり取り入れられていない「香り」であるが、レッジョ・エミリア市の幼児教育では意識して環境設定を行うことで子どもたちの活動に取り入れられていることが分かる。子どもたちは、「香り」をテーマにしたプロジェクト活動を展開し、創造性あふれる表現をしている。しかし、ここで注目したいのは、「香り」のみを取り出して感覚を育てようとしていないことである。「香り」をテーマにしな

がら、音や色、感触や味覚など感覚を総合的に使うことで、無数の表現の可能性を生み出している。

【においに関する実践事例】

鳥取県仁慈保幼稚園によるにおいに関する保育実践が報告されている¹³⁾。

その事例によると、一人の子どもがスイセンのにおいに興味を持ったことから、においに関する活動が始まっている。絵本で紹介されていた「花を使った香水作り」に関心を持ち、花や果物の皮を使用して香水作りを行った。1週間ほど経ち、手作り香水が臭くなったことで、本物の香水と手作り香水はどう違うのかという疑問が出てきた。そこで、香水専門店に行き作り方を教えてもらったり、保護者に教えてもらったりするなど、試行錯誤しながら香水作りに取り組んだ。子どもたちのにおいに関する興味関心は尽きず、香水作りの他に、ごっこ遊びや栽培、「におい探しの街探検」など新たな活動に広がっていった。次第に、においに関する表現方法にも変化が現れ、自分の想像や経験してきたこと、感情などと結びつけて表現するようになったことが記されている。

この事例から、「におい」に気づいたことで香水作りの他にも新たな活動が展開され、子どもの遊びの世界が広がっていく様子が分かる。これまで保育現場であまり取り入れられていなかった「におい」に気づくことは、子どもの遊びの幅を広げ、好奇心に基づいた子ども主体のプロジェクト型活動へと展開するきっかけとなることが示されている。

このにおいに関する実践事例について、レッジョ・エミリア市の幼児教育と異なる特徴は、においへの気づきを芸術的に表現するのではなく、日常の生活経験に沿った活動を展開している点である。

これまでの先行研究から、嗅覚は意識されにくい感覚であること、においに気づく環境構成や保育者の援助を行うことで子どもを主体とした長期的な活動へ展開する可能性を有していることが明らかとなった。

以上より、本研究では、多くの園でも実践されている植物を使った色水遊びを通してにおいに気づく活動実践に取り組むことにした。

Ⅲ. 研究の方法

本研究では、幼稚園における「色水遊びを通したにおいに気づく活動」の保育実践に関する事例を抽出し考察する。

対象は、福岡県F幼稚園の3～5歳児である。対象の幼児は、これまでにおいに関する活動を意識的には経験してこなかった。そこで、においのある植物を保育環境に設定することで、遊びを通してにおいに気づく活動を実践した。

平成29年7月13日木曜日9:30～11:30、貞方・

野見山・川里・船越、及び保育サポーターとして依頼した福岡教育大学初等教育教員養成課程幼児教育選修4年次在籍の学生2名、計6名、は、色水遊びコーナーを園庭に設定した。主として、貞方が保育者として保育を担当した。当日は、主活動として3歳・4歳・5歳児クラスがそれぞれ時間差でプール遊びを行った。プール遊び前後の好きな遊びの時間に、3歳・4歳・5歳児の関心のある子が色水遊びを行うこととした。活動の様子はビデオ、ボイスレコーダー、メモによって記録し、分析を行った。

なお、事例について述べる際に、子どもの氏名が特定できないように倫理的配慮をした。

IV. 環境構成

1. 幼児の「気づき」

幼児教育は環境を通して行われるものであり、子どもが周りの環境に関わり、主体的に活動することが基本である。保育者は「子どもたちの主体的な活動や多様な体験を保証し、友だちや保育者とのやりとりなどで自らの考えを広げ、気づきや工夫をする体験が次の体験と結びついていくような環境を意識」¹⁴⁾することが求められる。そこで、本実践では、嗅覚を使った活動を行うにあたって、保育者主導ではなく子ども自身が「気づく」ことをねらいとした。においのある植物を色水遊びコーナーに設置し、子どもが色水遊びを通して「気づく」ことができるように環境構成を行った。

2. 準備物

【色花】

ツツジ、アサガオ、マリーゴールド、オシロイバナ、ハマボウ

【においのある植物】

ドクダミ、大葉、よもぎ、ローズマリー、ラベンダー、アップルミント、レモングラス、パイナップルセージ、ゼラニウム、カレープランツ

【その他】

すり鉢、すりこ木、漏斗、たらい、ペットボトル、プラスチックの蓋付き容器、ゼリーカップ、植物を入れる紙箱、紙コップ、ビニール袋、においの植物の写真テーブル5台

V. 結果

【3歳児】

これまでビニール袋に色花と水を入れて色水遊びをしており、すり鉢・すりこ木を使って色水遊びを行うのは初めてであった。慣れない道具に戸惑う姿は見られたものの、4歳児の様子を見ながら真似したり、先生に教えてもらったりしながら遊んでいた。次第に色水を作ることができるようになり、色花や色水の美しい色を楽しみ、色水をジュースに例えて遊んでいた。

遊びの時間が終わる頃には、「おうちに持って帰ってもいい?」と、色水をペットボトルに入れて大事そうに保育室の前に並べる姿が見られた。

エピソード1:「においもちご」

A児は、おしろい花やアサガオでピンクの色水を作り、嬉しそうに教師に見せていた。

A児:「いちごジュースができた。」

保育者:「においはどう?」

A児:「においもちご。」

本当のにおいではなくジュースを作った気分のままに、においについて答えた。



写真1 おしろい花で色水を作る様子。

【4歳児】

春に色水遊びを思いっきり楽しんでおり、本実践を行った7月は色水遊びをあまり行っていないかった。しかし、筆者らが色水遊びコーナーを設置していることで興味を示し、色水遊びを行った。すりこ木・すり鉢を慣れた手つきで使い、あっという間に色水が完成した。

エピソード2:「バナナジュースできた」

準備していた色花が少なくなった時の出来事である。

B児:「バナナジュース作っちゃろうか?」

走って、園庭にある黄色い花を摘んでくる。

すりこ木・すり鉢を慣れた手つきで使い、摘んできた花で黄色の色水を作った。

B児:「バナナジュースたっぷりできた。」

バナナジュースをペットボトルに移し替えて得意気に見せていた。

エピソード3:「同じ葉っぱを探してみよう」

C児:「もう(どくだみの葉)なくなった。」

保育者:「これ幼稚園にもあるよ。」

C児、突然走り出す。

保育者:「これと同じ葉っぱを探してみよう。」

園庭の数か所を探してみる。

C児:「木のしたかな?」

C児:「あ、これかな?」「いいにおい?」

どくだみの葉を見つけ、おっけてみる。

C 児：「いいにおい。」
C 児：「あったー！！」葉を摘む。

【5 歳児】

はじめは色花を中心に使い、色水を作ることを楽しんでいった。次第に「いいにおいせん?」「バジル!」「におってみて。」「なんのにおいがする?」と、においに興味を持っていった。「どくだみ茶!」「青汁!」など、においを遊びに取り入れる子がいる一方、草花をおってみるものの、あまり興味を示さずに色水を作ることに夢中な子、どのにおいも「くさい」と表現する子もいた。

エピソード4:「友達の分を摘もう」

D 児：「どくだみがほしい。」
保育者：「こっちにあるよ。」
園庭に生えているどくだみの葉へ誘う。
D 児：「知ってるよ。」
どくだみの葉を探しに行き、すぐに見つける。
D 児：「14 枚いる。だってポプラ組、みんなで14人だから。」
「1, 2, 3…」
数を数えながら、D 児は同じクラスの友達の分を摘み、みんなのいる場所へと戻った。

エピソード5:「なつかしいにおい」

E 児：「ストロベリージュースみたい。色混ぜても色が変わらないよ。」
保育者：「あ これすごくいいにおい 癒されるね。」
E 児：「いい香りになったよ。」
保育者：「すごく、いい香りがしてくる。これもいいにおいがする。」
F 児：「バジルスイートピー。抹茶みたい、麦茶みたい。なんかいいにおいしてくる。昔つくったお茶のにおいがする。なつかしいにおい。」
保育者：「おおー。」
F 児：「どくだみ茶やる。」
保育者：「知ってる?」
F 児：「どくだみってお薬になるもん。」



写真2 保育者が植物のにおいを嗅ぐことで、子どもたちがにおいに気づききっかけとなった。

エピソード6:「お母さんにプレゼント」

どくだみの葉をすりつぶした時の出来事である。
G 児：「どくだみ茶ができた。これ飲んでもいいの?」
保育者：「このままじゃ飲めないね。どくだみ茶の作り方知ってますか?」
G 児：「知ってるよ。じゃあ、やり方やってみようか?」
園庭にどくだみの葉を取りに行く。
G 児：「やり方(作り方)の本見ないといけない。クックパッドにのっているかな?」
保育者：「のっているかもね。」
G 児：「お母さん、今プレゼント。これお母さんにひみつしてて。」

どくだみ茶を作る為に、きれいな葉を選んで摘む。
G 児：「これみんな乾かすと。」
保育者：「どこに乾かしたら乾くかな?踏みつぶされないところ?」
G 児：「あっ、いいこと考えた。」
砂場で乾かそうとする。
保育者：「いいかも。飛んでいかないかな?」
G 児：「飛んでいくよね。どうしようっか?」
保育者：「何か重たいもの置いとく?」
G 児：「石ころないかな?」
砂場の砂の上にどくだみの葉を広げ、飛ばないように石を置き、乾かそうとする。その後、園舎に戻り、紙に「ドクダミさわるな」と書き、砂場に戻ってくる。乾かしているどくだみの葉の上に紙を置き、他の園児に触られないようにする。
G 児：「先生、これお家にもってかえる。」
保育者：「じゃあ、また後で見に来ようね。」

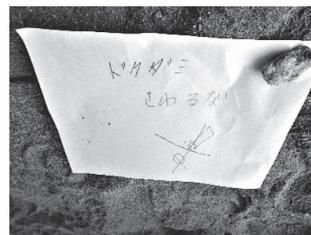


写真3 「ドクダミさわるな」



写真4 砂場でどくだみの葉を乾かす様子。

活動終了後、「においのプレゼント」として、使用した植物を1種類ずつ蓋つきの瓶に入れて5歳児クラスに渡した。

本実践後の7月27日、5歳児クラス担任の保育者A氏にインタビューを行った。

本実践終了後、5歳児は「においやさん」遊びを始め、子どもたちが目をつぶって「どのにおいが好きで

すか?」「わたしは、これ。」と好きなにおいを選んだり、「どんな気分ですか?」「ラベンダーはどうでしょうか?」と友達の気分に合わせてにおいを見つけたりするなど、においを遊びに取り入れる姿が見られた、とのことであった。

VI. 考察と今後の課題

本研究では、幼稚園における「色水遊びを通したにおい気づく活動」の保育実践に関するエピソードを抽出し、分析を行った結果、次のことが明らかとなった。

1. 年齢による違い

色水遊びからにおい気づく活動の中で、においへの気づき方と社会性の発達において、年齢による違いが見られた。

【においへの気づき】

3歳児は、遊びの世界に入ると、現実のものをそのまま捉えるのではなく、遊びの気分のままにものを見立てていた。エピソード1「いちごジュース」では、実際のいちごを使った色水ではないのに、おしろい花やアサガオでつくった色水をいちごジュースに見立て、「においもいちご。」と想像した。本実践では、3歳児も草花のにおい気づくことをねらいとしていたが、実際の草花のにおいへの気づきは見られなかった。

その背景として、3歳児はファンタジーの世界で遊びを行っていること、また色水を視覚的に楽しむことが不十分のまま、植物のにおい気づくことには至らないのではないかと推測する。しかし、本実践において、3歳児は草花などの自然に触れる体験を通し、色の美しさや、花から色水ができる不思議さなど、視覚的に楽しむことができたのではないだろうか。

4歳児のエピソード3ではどくだみの葉を「いいにおい」と表現し、同じにおいを持つ葉が園庭のどこにあるのか探しに行った。植物にはそれぞれにおいがあることを知り、においを頼りにどくだみの葉を探す行動が見られた。においに興味を示す子がいる一方、エピソード2「バナナジュース」のように視覚的に楽しみ、見立て遊びを行う姿が多く見られた。

5歳児は、においへの気づき、関心を持って遊びに取り入れる様子が見られた。エピソード5では「抹茶みたい」と色とおいを使って表現しており、エピソード6では「どくだみ茶」を作ろうと取り組んでいる。5歳児は、これまでの遊びの中で花から出る色に関して視覚的に十分に楽しんでいたため、気づいていなかったにおいに関心を持ったと考えられる。

以上より、においへの気づきには、年齢によって違いがあることを把握できた。3歳児はまず視覚的な面に関心を持って遊び、4歳、5歳と年齢が上がるにつれて色だけでなく、においに関心を持って遊びに取り

入れることが明らかとなった。

また、4歳児は、良いにおい・嫌なにおいを判別し、自然の中でおいを探するために使っており、5歳児になるとにおいを日常生活の中の事物と関連づけて考えられるようになっていた。5歳児は、様々な生活経験をしており、4歳以前ににおいも記憶として持っている。ただ、その記憶は、においを使って呼び起こすことをしなければ、日常生活の事物と関連づけることはなく、新たな発見や子どもの主体的に考える力を育てることにはつながらない。視覚的な面だけでなく、5歳児でにおいを使った活動を取り入れることは、今までの五感を使って集めた情報を整理し、日常生活や社会に視野を広がるきっかけとなる。視覚的・触覚的な面を意識した保育活動に留まらず、においに関心を持った活動につなげていくことで、子どもの育ちをより促すことが示唆される。

【社会性の発達】

4歳児のエピソード3において、C児はどくだみの葉を自分の遊びに使うために、園庭内で見つけた葉を摘んでいた。これは、「自分のため」の行動であると言える。5歳児、エピソード4では「みんなのために」とクラスの人数分のどくだみの葉を摘み、エピソード6では「お母さんのために」どくだみ茶を作ろうとしていた。5歳児のエピソードからは「人のために何かをしよう」と考え、行動していることが分かる。

以上より、子どもたちは遊びや生活を通して、自分が他者に役立つことをしようとしていたり相手の気持ちを考えて行動したりするようになるという社会性の発達が示された。

2. 個人への配慮

においへの興味を持ち、遊びに取り入れようとする子がいる一方で、においへの興味を示さない子や、どのにおいも「くさい」と表現する子がいた。「きれい」「ジュースみたい」など視覚的に感じるものは興味を持ちやすいが、においの感じ方に関しては個人差があることが示された。

また、保育者の思う良いにおいと、子どもの思う良いにおいには、違いが見られた。教師はハーブのにおいを良いにおいとしており、ラベンダーやミントのようなハーブのにおいは生活の中で使われていることもあり、子どもも良いにおいと感じるだろうと考えていた。しかし、子どもが良いにおい、嗅ぎたいにおいは、ハーブではなく、ドクダミやヨモギのようなよく道ばたに生えている植物であった。ドクダミは保育者の予想では、臭い、嫌なにおいとしていたため、意外な展開に、子どもと大人のにおいの感じ方に違いがあることを改めて知らされた。「におい」から感じる思いには個人差があり、「におい」から子どもがどのようなことを思ったのか聞くことで生活経験と結びつけ

たり、子どもの表現力を高めたりすることにつながる
ことが示唆される。

なお個人的生活経験と密接に結びついていると
考えられる。保育活動に取り入れる際の留意点として、
保育者は個人的生活経験の違いや一人一人の感じ方に
多様性があることを認識し、配慮を行う必要がある。

その他に、アレルギー性疾患を持つ子どもへの配慮
や保護者との連携も不可欠である。活動において、保
育者同士でアレルギー性疾患の子どもの把握に加え、
植物の配置場所や子どものにおいへの気づきの流れを
共有して、安全管理に努める必要がある。

3. 保育者による援助

5歳児エピソード5において、保育者の言葉がきっ
かけとなり、子どもたちのにおいへの「気づき」が生
まれた。色水に対して視覚的に関心を持って遊んでい
た子どもの傍で、保育者が「あ、これすごくいいにお
い。癒されるね。」と言葉を発したことによって、子
どもの言葉は「いい香りになったよ」から「昔つくっ
たお茶のにおいがする」と変化した。保育者による言
葉掛けにより、においに気づき、自分の生活経験を活
かした分析を始めたことが分かる。保育者の言葉掛け
や表情、タイミングなどは、子どもたちの気づきに影
響を与える。エピソード5における言葉掛けの背景と
して、「においへの気づき」というねらいに対する保
育者の意識が関係している。活動を展開するにあたっ
て、保育者のねらいに対する意識や言葉掛けの重要性
が示唆された。

4. 本実践後の様子

本実践後の保育者A氏へのインタビューより、5
歳児はにおいに気づいたことをきっかけに、においに
関心を持ち、遊びを展開していることが分かる。にお
いに気づき関心を持つことによって、活動が継続的に
行われる可能性を有していると考えられる。今後、にお
いに関する活動を展開するにあたって、子どもたちがよ
り好奇心や探究心を持てるように、においの環境構成
や保育者の援助が求められる。

においに気づく環境構成として、においの植物を園
庭に植えることが挙げられる。本稿の実践では、ハー
ブや色花は、園外から集めたものも使用した。前もっ
て植物を採った場合、日にちをおくごとに植物の色や
においが悪くなり、管理が難しかった。また、子ども
たちが自分の手で植物を摘む経験は、目的をもって考
え、選択する力を育てることにつながる。予め与えら
れた環境での活動は、保育者の意図に沿って子どもの
気づきを促しやすいかもしれない。しかし、その後の
活動への広がりにおいて、子どもが自由に考え、動く
ことを制限してしまう可能性が懸念される。子ども自
身が自由に植物に触れ、植物の収集のしやすさや保存
の観点を考えると、園庭ににおいの植物を植えること

は、環境構成をより良くすることにつながると考える。

5. 今後の課題

本研究は、「色水遊びを通したにおいに気づく活動」
の保育実践に基づいて考察を行った。これまでの遊び
で意識していなかったにおいに気づくことによって、
子どもたちの活動の幅が一層広がることが示唆され
た。また、においに気づくことで探究心を持ち、「にお
い」をテーマにした長期的な活動へ展開する可能性
を有していると考えられる。しかし、本研究では、にお
いに関する活動の中でも「気づき」の部分に焦点を当
てて保育実践を行った。今後の課題として、においに
関する活動を長期的に展開するにあたって、環境構成
や保育者の援助、言葉掛け、活動における子どもの育
ちを分析、検討する必要がある。

謝 辞

本研究においてご協力いただきました福岡教育大学
附属幼稚園の先生方、子どもたちに心より感謝申し上
げます。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 山下慎二「生活科における嗅覚活用能力の育成に
関する一考察」愛知教育大学生生活科・総合的学習
研究 第6号, 2008年, 59-68頁。
- 2) 野田敦敬・山下慎二「生活科における嗅覚を活か
した活動に関する調査研究」愛知教育大学教育実
践総合センター紀要 第11号, 2008年, 77-84頁。
- 3) 同上。
- 4) 同上。
- 5) 松浦公紀監修「モンテッソーリの子育て 子ども
の力を引き出す環境」2013年, 学研教育出版,
36-37頁。
- 6) 同上。
- 7) 松浦公紀著「モンテッソーリ教育が見守る子ども
の学び」2004年, 学習研究社, 81頁。
- 8) 藤原元一・桂子・江理子著「やさしい解説モンテッ
ソーリ教育」2007年, 学苑社, 107-109頁。
- 9) レッジョ・チルドレン著「子どもたちの100の
言葉 レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録」
2012年, 日東書院本社, 16頁。
- 10) 宮崎薫「レッジョ・エミリアの幼児教育におけ
る美的経験と学び」あいだ/生成=Between/
becoming, 7巻, 2017年, 27-44頁。
- 11) 佐藤学監修 ワタリウム美術館編「驚くべき学び
の世界 レッジョ・エミリアの幼児教育」2011年,
東京カレンダー, 239頁。
- 12) 秋田喜代美「レッジョ・エミリアの教育学」佐藤
学・今井康雄編「子どもたちの想像力を育む アー
ト教育の思想と実践」2003年, 東京大学出版社,
76-77頁。

- 13) 大豆生田啓友編著「「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育」2014年，学研教育みらい，11-25頁。
- 14) 無藤隆，汐見稔幸「幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 はやわかり BOOK」2017年，学陽書房，21頁。